連載

あのマチ このムラ・地域おこし活躍中

No62

上士幌町の事例

―「健康・環境・観光」をキーワードにしたまちづくり―

バルーン（熱気球）

上士幌町の取り組みは実に斬新である。まず、「やってみよう」から始まる。

上士幌町にいると自然は資産ではなく資源であることが理解でき、ここに住んでいる人々が一番恩恵を受けていることを強く感じる。未来からの贈り物である自然を大切に使い次の世代へバトンタッチするために町全体が無理のない暮らしをしている。外からの移住者に対しても受け入れ方は優しい。長続きする要因はそこにある。それらの一端を紹介する。

1．地勢

上士幌町は広い町である。その広さは東京二三区よりも約七〇㎢上回る六九五・八七㎢である。その内訳は七六％が山林、一四・五％が農用地、二・四％が牧草地、宅地が〇・六％となっている。

十勝地方の北部、大雪山国立公園の東山麓に位置し東は足寄町、西は新得町、南は士幌町、北は上川町、置戸町に隣接する。北西部は大雪山国立公園の指定地域で広大な国有林が占めているが、南部は穏やかな丘陵地帯が広がり、農耕適地である。気候は内陸性気候で昼夜・夏冬の寒暖の差が激しく、降水量は比較的少ない。積雪量も少ないが山間部では二m以上に及ぶこともある。日照時間は非常に長く、特に冬期間は「十勝晴れ」と呼ばれる晴天の日が続く。冷涼な気温は農作物の生育にとっては有利なのである。

2・沿革

町名の由来はアイヌ語の「シュウウホロベツ」（鍋をうるかした川）から転じたといわれている。

明治四〇年、移住民六名の入植により始めて開拓の鍬が下ろされた。大正一五年、帯広までの鉄道開通により入植者が激増し農畜産物生産や奥地森林資源の開発、集散地としての市街地が形成され、昭和六年四月に士幌町から分村独立した。

戦後、産業の復興に不可欠な電力の開発・供給のため糠平地区に発電所が建設され、急激な人口増加と経済の活況を呈し、昭和二九年四月に町制を施行した。

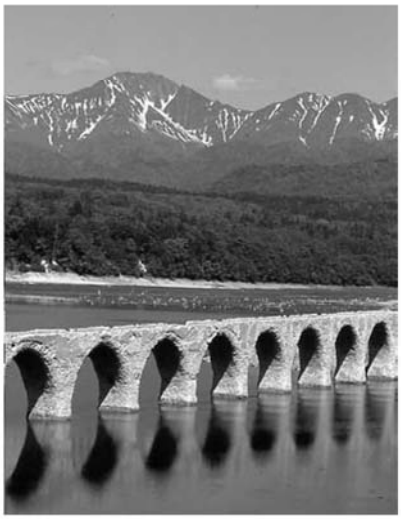
昭和三〇年の国勢調査において一三、六〇八人を数えた人口はその後のダム建設工事の完了、林業の衰退、国鉄士幌線の廃止などの影響もあり、人口が減少していき、平成二二年十月の国勢調査では五、〇七八人となっている

←高育種価牛由来受精卵移植推進事業第1号出荷牛

←ナイタイ高原牧場

3・特徴

過疎化は進んでいるが関係者の絶え間ない努力により基幹産業である農業の基盤整備強化、大雪山国立公園の自然保護、バルーンフェスティバル（熱気球大会）、A四～A五等級の十勝ナイタイ和牛、北海道遺産旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群、源泉かけ流しの「ぬかびら源泉郷」など恵まれた資源を活用した魅力ある観光開発や地理的条件を活かした企業誘致など各種事業を展開している。その中で「健康、環境、観光」を柱としたイムノリゾート構想をすすめ「健康と癒し」「都市と農村との交流」のまちづくりに力を入れている。心身の健康を独り占めできる町と言っても良い。



タウシュベツアーチ橋

また、本年で開町八〇周年を迎えるにあたり、十一月に記念式典のほか多くの行事が企画されている。

4．スロータウンの概念をまちづくりに

スロータウンとは、地域の持つ人的、自然環境、産業、歴史文化などの資源に光を与え、手間隙を惜しまず保存と再生、循環型社会を目指すもので、時間を追いかけ、利便性、大量生産・大量消費といったスピード社会の対極を意識したまちづくりである。

大自然の中で農業を基幹産業にしながら温泉につかり時間とともに生きる上士幌町にはスローな生き方が最高に似合うのである。

スピード社会の対極のまちづくりをすすめることで、都市と農村の交流をはぐくみ、活発化させることによって町の発展があることを認識をしながら、さまざまな事業に取り組んでいる。

5．イムノリゾート上士幌構想

「イムノリゾート」とは免疫学を意味する「イムノロジー」とリゾートの掛け合わせた造語で「免疫保養地」と言われている。免疫バランスを是正するような「健康と癒しの観光」を目指している。上士幌町はイムノリゾート計画の発祥の地である。

提唱者はＮＰＯ法人イムノサポートセンター理事長　西村孝司北海道大学教授である。

平成一六年度に総務省が創設した「地域再生マネージャー事業」に上士幌町が採択され、三年間取り組んだ。この事業は、市町村の地域再生を目的とする取り組みに対して、具体的・実践的ノウハウを持つ企業または人材などを派遣して、地域特性を活かしたまちづくりの支援を行うものである。

この事業を通して、「イムノリゾート上士幌構想」を立ち上げた。この構想は「健康・環境・観光」をキーワードに都市と農村の共生と交流により、地域の活性化を目指すものである。住民の健康をまず第一に考え、豊かな畑とそこから生産される農畜産物、科学的根拠に基づいた癒しの森林浴地の選定や温泉浴などを中心に総合的な「健康・環境」への対策を講じている。あわせてこれら地域に存在する資源を有効に活用した観光の取り組みを進めている。

具体的には人の体内環境の維持に必要な免疫をはじめとする神経内分泌物のバランスを改善することを目的として、ゆっくりと地元に滞在し、健康に配慮されたおいしいものを食べ、森林浴を行い、温泉につかりながら日ごろのストレスを解消していく方法である。日常の偏った食生活やストレス過多により、大げさであるが人間は体内環境まで破綻させ始めている。キレやすくアレルギー体質の抵抗力の弱い人達が増え、特にその傾向は子供たちに目立っている。西村教授は「解決策は先人たちが長年に渡り会得した健康に良い生活習慣を忙しく落ち着きのない現代社会に積極的に取り入れていくことである」と説明をしている。この考え方により、医科学的根拠に基づいた「健康を考える・ヘルスツーリズム」を町全体で取り組み、新たに都市と農村の交流が生まれ、観光客ばかりではなく、まず地域に住む子供たちが元気に育ち高齢者が生きがいを持って暮らすこと

ができる豊かなまちづくりに役立っていると感じた。

6．無から有を生んだ「スギ花粉リトリートツアー」

平成一七年春、上士幌町は「スギの木」がないことをヒントに、スギ花粉症に悩む人たちを対象にした「スギ花粉リトリート（避難）ツアー・モニターツアー」を実施した。スギ花粉症は、アレルギー症のひとつで食生活の偏りやストレス、大気汚染などに起因する先進国における現代病で、特に東京などの大都会に患者が多いといわれている。花粉症による労働意欲の低下によって、その治療に数千億円を費やしているといわれている。大きな損失である。

国民的な課題に取り組んだツアーは、一〇人のモニター募集に対し二七六人もの応募があり、マスコミを含め大きな反響を呼んだ。この取り組みに観光業界も注目し、全国レベルでのヘルスツーリズム組織が立ち上がるなど健康が新たな商品として動き始めている。スギ花粉が多く飛散する大都会、「スギの木」が無い上士幌町とは明らかに対極の関係にあり、そのことが互いに引き合い交流が生まれるという仕掛けの第一弾は成功を収め、現在は町内のホテル業者が主体となり継続した取り組みを進めている。

7．移住促進・二地域居住の取り組み

人口減少は上士幌町にとっても大きな課題である。イムノリゾート上士幌事業の一環として移住促進・二地域居住事業を進めている。

「団塊の世代」の大量退職は雇用や消費に大きな影響を与えている。全国に先駆けて北海道が進めた「北の大地への移住促進事業」に、上士幌町も当初から参画してきた。この間、国のモデル事業を活用しながら、移住者のライフスタイルへの対応や移住定住・二地域居住の促進について、既移住者や移住希望者へのアンケートや聞き取りを重ね、移住への悩みやニーズを把握するとともに、ワンストップ窓口の設置や受け入れの基盤整備などを進めてきた。また、家財道具や調理器具など必要最低限の生活備品や住居を用意し、上士幌町への移住や二地域居住を検討している方を対象に「生活体験モニター」の受け入れを実施している。平成二〇年には専用のモデル住宅が地元建設業協会によって新設されている。

↑二地域居住住宅外観

←二地域居住住宅の室内

平成一八年から二三年三月までの生活体験者数は一〇九組二一九名で、この事業を通して一七組三〇名が移住、二地域居住している。移住・二地域居住に関する民間によるサポート組織として平成一九年に「上士幌町交流と居住を促進する会」が設立され、首都圏へのPR活動や農村地域や市街地の空き家・二地域住居モデル住宅プラン作成事業を進めている。また、平成二二年には移住定住を実践的に活動するNPO法人「上士幌コンシェルジュ」が設立され、官民一体となった取り組みを進めている。

生活体験者から生活するための仕事に対する希望が多いことから、生活体験と仕事をパッケージした「ちょっとだけかみしほろ人」の試みを今年の冬一月に行った。二名の方が町内事業所に働きながら生活体験し、事業所の方々と仕事を通じて交流しながら町民となった生活を一ヵ月ほど過ごし、今後、移住を本格的に検討することになっている。上士幌町は大規模経営の農業者が多く、労働力の確保も課題である。この取り組みを通じて、移住と仕事のマッチングが進むような展開を目指している。

8．農林商工などの連携

上士幌町は豊かな農林畜産物が生産されているが、付加価値を高めた商品化など、いわゆる「六次産業化」が課題となっている。

上士幌町では、平成二一年度から町単独事業である「農林商工連携促進事業」を創設した。この事業内容は、町内の企業・農業者・団体などで組織するグループが行う「商品開発・販路拡大・ブランド化」を研究する事業に対して、対象経費の八〇%を補助するものであるが、その補助率が際立って高くなっていることからも町全体で力を入れていることが伺える。

この資金的な支援とともに、意欲ある事業者の発掘や事業者のマッチング、町産品の販売ルート開発などを役割として「農林商工連携等専門員」を平成二一年に上士幌町商工会に配置している。

現在も上士幌町産和牛（十勝ナイタイ和牛、かみしほろ和牛、十勝ハーブ牛）の特産化やエゾシカの有効活用、蜂蜜加工品開発など六つの研究グループが支援を受け

て取り組みを進めている。

9．ICT活用と「十勝かみしほろん市場」

上士幌町の豊かな地域資源や物産、移住の促進など多様な情報を

必要な方にいかに伝えていくことができるか大きなポイントである。

平成二〇年に自治体が運営するブログポータルサイトとしては全国二つ目となる「かみしほろん.com」を開設した。町民や町にゆかりのある人たちが開設したブログでは、町の暮らしや魅力など生の情報が発信され、現在はポータルサイトトータルで一日五万ページビューとなっている。その中でブログ利用者間の情報交換により本町への移住者も出てきている。また平成二二年には地場産品をインターネット販売する「十勝かみしほろん市場」を農林商工連携専門員が中心となって立ち上げた。現在JAをはじめ七つの事業者が商品を出店しており、販売促進のための研究・実践を進めている。

10．温泉にこだわる温泉地「ぬかびら源泉郷」

「ぬかびら源泉郷」は、大雪山国立公園内にある山と森に囲まれた温泉街で、九軒の宿泊施設がある。

ぬかびら源泉郷旅館組合は、泉質のすばらしいことをアピールするためにさまざまな取り組みを行っている。

全ての宿泊施設の温泉が加水や循環をしていないことから、日本温泉総合研究所へ検査を依頼した結果、源泉から良質の状態で湯が注がれていることが証明され、平成二〇年に「源泉かけ流し宣言」を行った。温泉全体が「源泉かけ流しであるのは全国的に稀である。翌二一年六月に「全国源泉かけ流しサミット」が開催され、その後、全国的に温泉地をPRしたい地域要望に応えるために、町は字名住所を「上士幌町字糠平」から「上士幌町字ぬかびら源泉郷」に変更した。温泉街の温泉をめぐることができる「湯めぐり手形」などのサービスを展開している。小さな温泉街であるが、結束力のある温泉地としての取り組みは全国から注目を集めている。

11．地域おこし協力隊

総務省が創設した「地域おこし協力隊」は都市部に住む若者などを「過疎地域」などに送り込み、新しい発想で地域を盛り上げる制度である。若者がいて、よそから来た若者がいて、夢中になって前に進む若者がいることがその地域の発展につながるといわれている。

上士幌町では平成二二年から最

大三年の期間で六名を上士幌地域おこし隊として委嘱し、「商工観光振興」など六つの分野に配置している。隊員は道外からも来ており、これまでの経験を活かして新たな事業の立ち上げなど、さまざまな地域活性化の活動を行っている。

上士幌町農業形態別農家戸数推移

	平成12年		平成16年		平成22年	
	戸数	面積 ha)	戸数	面積 ha)	戸数	面積 ha)
畑作　専業	72	2,671	72	2,671	65	2,603
酪農　専業	77	4,554	77	4,554	70	4,896
畜産　専業	8	94	8	94	7	153
小　計	157	7,319	157	7,319	142	7,652
畑作・野菜	11	433	11	433	13	534
畑作・酪農	1	42	1	42	0	0
畑作・畜産	9	434	9	434	9	578
酪農・畜産	7	377	7	377	4	150
小　計	28	1,286	28	1,286	26	1,165
合　　計	185	8,605	185	8,605	168	8,817

（上士幌町農協調査）

JA 上士幌取扱高抜粋（百万円、%）

	平成12年度	平成16年度	平成22年度
酪農・畜産部門	5,902	7,958	10,978
農　産　部　門	2,538	3,336	2,820
合　　計	8,440	11,294	13,798
酪農・畜産割合	69.9	70.4	79.6

12・農業事情

農業は上士幌町の経済基盤を支える重要な基幹産業である。生産基盤の整備と経営の近代化を進めるとともに、新しい農業の取り組みとして、野菜などの高収益作物の導入を進めている。特に畜産・酪農においては二二年度ＪＡの取扱高は一〇〇億円を超え、取扱高の八〇％を占めている。十年前に比べ五〇億円増えている。いち早くＥＴ技術を活用した和牛素牛、乳牛の生産に取り組んできた結果が出ている。酪農・肉用牛生産を中心とした畜産経営と、小麦・豆類・馬鈴薯・てん菜の畑作四品を中心とした畑作経営を展開し、寒地型農業の確立と大規模近代化経営の定着が図られている。しかし、規模を拡大しながら生産額を伸ばしてきているが、農家戸数は減少傾向にあり、また、家族労働だけでは限界にきている。

将来にわたり地域農業を維持・発展させるためには農業を取り巻く社会的・経済的変化に適切に対応できる農業生産基盤の充実、および、高技術と優れた管理能力を持つ農業者が必要である。現在も農協運営のコントラクター事業を利用し、農作業の分業化による組合員の労働力不足の解消や農業機械の過剰投資抑制のなどのコスト低減を図っている。

13・ＴＭＲセンター

酪農における優れた経営能力を有する農業者の育成を図るため、新たな営農支援組織「ＴＭＲ（混合飼料）センター」の設立を申請中である。このことにより、①草地管理にかかわる機械や建物が共同所有となり個人所有に比較してコスト軽減となる。

②高いレベルの酪農経営へと意識改革が培われる。

③年間を通して良質なサイレージで乳量・乳質が向上する。

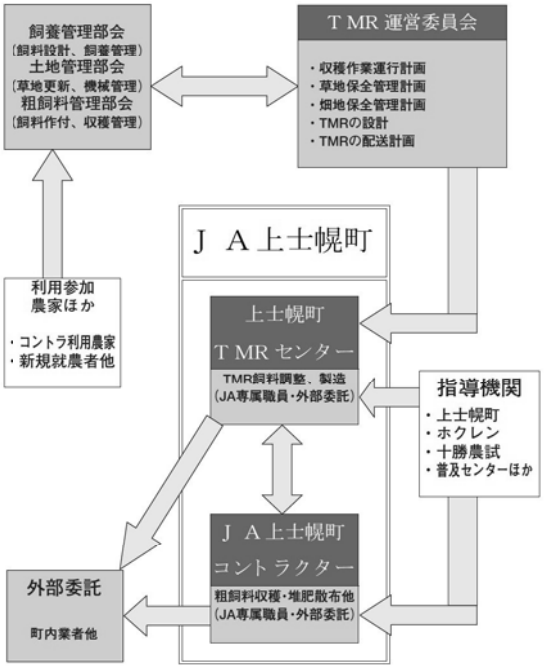
④仕入れの一元化で肥料費、飼料費などのコストを削減できる。

⑤草地の一元管理で各構成員から出る糞尿を有効に管理・還元できる。

⑥牧草収穫作業時の負担が軽減される。

⑦良質自給飼料の低コスト生産

上士幌町TMRセンター組織体系図（案）



が可能になる。

⑧新規雇用の確保にもつながっていく。

⑨担い手の育成や新規就農者への支援組織として機能を発揮し地域内に居住する農業従事者の離農を抑制し、農家戸数の減少に歯止めをかけることができる。

「農山漁村活性化プロジェクト支援事業」はこのような効果を生むための三年間の事業であり、今年度よりＪＡが取得し、将来的には法人化を目指すべく詳細の詰めを行っている。総事業費は多額である。

この設立の背景には次のようなことがあった。

①個人での酪農経営には多くの課題と限界がある。

②高齢化による後継者不足や規模拡大による労働力不足。

③計画的な草地更新が出来なくなることで牧草の適期収穫を逃し良質な粗飼料確保が難しい。

④機械投資の負担増などである。それらの結果、乳量・乳質が落ち、農家の収入は落ちてしまう。

そのために二一年から十分な打ち合わせ、話し合いが持たれた。設立前に十分検討していることは、

①しっかりとした事業計画。

②無理のない単価設定。

③役割分担。

④メンバーの将来展望を明確化。

⑤法人としての管理範囲。

⑥参加者全員が経営状況を把握できる体制。

⑦参加者全員の持ち込み資産の評価と公平なルール作り。

⑧構成員の家族の理解とそれぞれの労働環境を含む経営状況の把握。

⑨個人名義の資産の扱い。

最終的に求めることは、乳量アップと労働時間の削減である。

課題として、

①外部雇用の拡大。

②分業制の中で男性の乳牛管理への労働集中。

③女性の外での労働軽減。

④粗飼料生産基盤の確立。

⑤高齢者の経営意欲継続。

⑥後継者問題など

がある。

町を上げて十年先に起きる問題を今から解決していく姿勢は農業や地域の発展には不可欠なことである。

源泉かけ流し温泉に入ると、良い考えがたくさんうかびます。

ＥＴ技術：Embryo Transfer 受精卵移植技術

ＴＭＲ：Total Mixed Rations 粗飼料と濃厚飼料などを適切な割合で混合し乳牛の養分要求量に合うように調製した飼料

㈳北海道地域農業研究所
事務局長　小林久人